

## 大甲の聖人と呼ばれた志賀哲太郎



片倉 佳史（武蔵野大学客員教授・台湾在住作家）

大甲は台湾島中西部の沿岸にある小都市である。現在は台中市に組み込まれ、大甲区となっている。文化の街としても知られる大甲だが、ここに26年にわたって教育に携わった人物がいる。今回はこの志賀哲太郎の生涯と大甲の関わりについて述べてみたい。

### ●台湾中部の都市・大甲に息づく一人の教師

大甲（たいこう）は大安溪と大甲溪によって形成された沖積平野の上に位置する町で、人口は約7万7千人。周囲は豊かな田園地帯が広がっている。新竹・苗栗地方の沿岸部のように風害・塩害に苦しめられることもなく、古くから穀倉地帯となっていた。また、日本統治時代は大甲帽（パナマ帽）の製造で知られ、台湾を代表する地場産品となっていた。

また、航海の女神として親しまれる媽祖信仰の総本山「鎮瀾宮（ちんらんぐう）」があり、媽祖の誕生日である旧暦3月23日頃には盛大な祭事が開かれ、街は信徒で埋め尽くされる。普段は静かな地方都市の情緒に包まれているが、数多くの人材を輩出した街でもあり、文化の気風が色濃く漂っている。

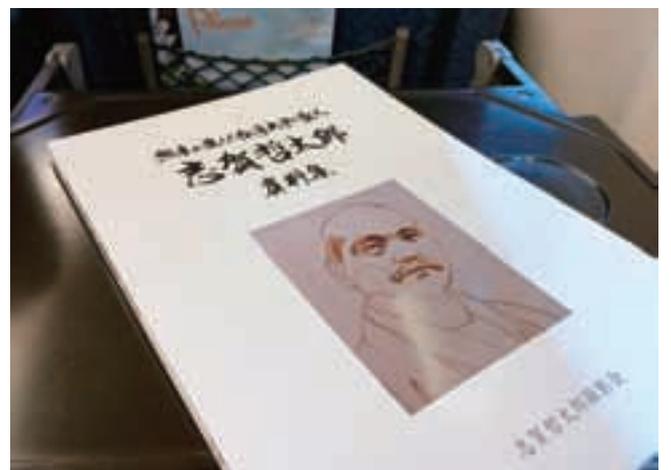
筆者は数年前、熊本在住の野元政司氏の紹介を得て、熊本出身の志賀哲太郎という人物の墓地を訪れた。大甲の鎮瀾宮は何度か訪れていた。台湾の地方都市ならではの落ちついた空気が漂い、魅力的な土地である。しかし、志賀哲太郎という人物は知っていたものの、訪れる機会がなく、念願かなっての取材となった。

長らく、志賀哲太郎についての記述は、『台湾と日本・交流秘話』（展転社）が唯一という状態だった（永山英樹氏が執筆を担当）。筆者もこの書籍で志賀哲太郎という人物を知ることになった。

現在、志賀哲太郎については顕彰会が組織されており、豊富な内容を誇る資料集が刊行されている。その編者であり、著者でもある増田隆策氏は、足かけ4年の歳月をかけて文献・史料を当たったという。そして、郷土史研究家の張慶宗氏と連携を取り、綿密な現地取材を経て、この資料集をまとめあげた。

志賀が生を受けたのは1865年、世を去ったのが1924年のことなので、すでに1世紀という歳月を経ている。1千名を超えるという大甲の教え子たちも多くは故人となっている。取材や調査が難しいことは言うまでもあるまい。

本稿では160ページにおよぶこの資料集をもとに、「大甲の聖人」と謳われる志賀哲太郎の生涯をたどってみたい。



資料集はまさに圧倒されるような迫力で迫ってくるものがある。増田隆策氏の思いが伝わってくる一冊だ（志賀哲太郎顕彰会編）。



大甲の鎮瀾宮は媽祖信仰の本山として知られる。春には各地の媽祖廟を神像と信徒が巡る「媽祖遶境進香」が催される。

## ●肥後の国に生を受ける

大甲の郊外に鐵砧（てっちん）山という山がある。高さは236メートルほどなので、小高い丘と言ってもいいほどだが、頂からは大甲の街と、遠くに台湾海峡の海原が見える。

その南麓に一人の日本人の墓地がある。その人物は志賀哲太郎と言ひ、日本統治時代に当地で教師を務めた人物である。

志賀の墓地は山肌にあるため、見晴らしがいい。敷地は広く、周囲には志賀の教え子たちの墓園が、それこそ志賀の墓碑を守るかのように並んでいる。教え子から死後までも共にいたいと願われる教師とはどのような人物だったのだろうか。

志賀は1865（慶應元）年8月28日に肥後国田原村（現在の熊本県益城町田原）で生まれた。幼名は岩太郎。向学心旺盛な子供で、家の手伝いをこなす傍ら、学業に励む毎日だったという。その後、私塾で学び、21歳で上京を果たす。そして、明治法律学校（現在の明治大学）に進んだ。1887（明治20）年のことだった。

父の死去に伴って帰郷した志賀は、熊本で結成された政治団体・国権党の黨員となり、九州日日新聞（現在の熊本日日新聞）の記者になった。こ



大正13年に撮影された志賀哲太郎。領台初期に台湾へと渡った。

の頃は政治活動に深く関わるようになっていたが、間もなく政界を離れ、教育の世界に進むことになる。そして、領台翌年の1896（明治29）年、12月に台湾へ渡った。志賀は31歳になっていた。

日本統治時代の半世紀、台湾総督府は学校の整備を熱心に進めた。領台当初、台湾の児童の就学率は1%程度だったが、各種制度と環境を整え、終戦前年の1944（昭和19）年には児童就学率が93%にもなっていた。言うまでもなく、これは世界でもトップレベルの水準だったが、志賀はその黎明期に台湾へ渡ったのである。

## ●台湾での暮らしが始まる

志賀は当初、台北の新起町（現在の西門町界隈）に居を構え、酒屋を経営しながら、台湾語（ホロー語）の習得に励んだ。しかし、翌年には台中へ向かっている。当時の台中は熊本県出身者が多く暮らしており、そこに生きる術を求めた。

この頃は、基隆（きいるん）と高雄（当時の表記は「打狗」）を結ぶ縦貫鉄道が敷設中で、志賀は

ここで工事関係者を相手にした店を始めたという記録が残されている。

志賀が暮らしたのは台中の市街地ではなく、人里離れた三叉河（現在の三義）に近い伯公坑（はくこうこう）と呼ばれる場所だった。ここは勾配区間が続き、いわゆる「難所」だったので、多くの工員たちが集まっていた。志賀はここで工員を相手に商売する店を始めた。

志賀はここで島村ソデという一人の女性を雇っている。ソデは志賀と同じく熊本県出身で、婚姻関係はないものの、最期の時まで志賀と人生をともにした女性となった。

当時の台湾は治安が悪く、日本による統治を甘受しない勢力がゲリラ戦を展開していたほか、「土匪（どひ）」と呼ばれる武装集団が跋扈していた。志賀も襲撃に遭い、この時は事なきを得たものの、後にマラリアに罹ってしまう。当時、マラリアは何よりも恐れられていた病であり、一度罹れば7割は助からないとまで言われていた。

志賀は人力車に載せられ、伯公坑を離れた。そして、運び込まれた場所が運命の地となる大甲だった。医療施設のようなものはなかったので、市街地にある鎮瀾宮で治療が行なわれた。当時、ここは陸軍衛戍病院の大甲分院とされていたが、実態は名ばかりのものだった。志賀はソデの看病によって一命を取り留めた。

## ●「大甲」の地と出会う

1899（明治32）年、志賀は大甲公学校の教員となる。公学校とは台湾総督府が設けた初等教育機関で、1898（明治31）年8月16日施行の公学校令によって設けられた。当時の学校は内地人（本土出身者とその子孫）が通う小学校と、本島人（漢人系住民子弟）が通う公学校、そして、山岳地域に暮らす原住民族の子弟が通う蕃童教育所があったが、志賀は公学校の雇い教員として職に就き、その後、26年もの間、奉職することになる。

雇い教員とは戦前の日本で見られた職位で、師範学校卒業といった教員資格を持たない初等教育機関の教員で、いわゆる代用教員のことである。

2月に大甲に赴いた志賀は、台湾の土着言語である台湾語（ホーロー語）を習得し、5月頃から教鞭を執ったとされる。

当時の台湾には教育の概念そのものがなかった。生活も貧しく、日本による統治が始まったばかりの混乱期でもある。学校に子供を通わせる父兄は皆無に近かった。そのため、教員たちは学齡期の子供を持つ家庭を訪ね、教育の重要性を説いて回らなければならなかった。

志賀に限らず、領台当初の台湾、特に都市部以外の地域に赴任した教師や警官たちは、例外なくこういった役割を兼務していた。当然ながら、言葉が通じない不便や交通機関の未整備、そして、治安が安定しない中のことなので、その労苦は想像し得ないものがある。志賀の場合、大甲のみならず、近隣の外埔（がいほ）、内埔（ないほ）、大安（たいあん）、日南（にちなん）などにも足を延ばしていたという。

学校の設備も名ばかりのもので、貧相極まるものだった。大甲の場合も教室となる建物が用意できないため、市街地にある大甲文昌祠の一室を利用して授業が行なわれた。ここから志賀の教師人生は始まったのである。



大甲文昌祠。志賀の教師生活はこの廟の一室から始まった。日本統治時代の古写真。

## 大甲公学校校歌

一、  
南の國の中つ方  
大甲原に地をしめて  
日に新たなる 日の本の  
久遠の榮を祈りつ  
集うや健兒千四百  
集うや健兒千四百

二、  
鐵砧山（てっちんざん）の 霧晴れて  
黎明光り  
ひじりの君の 大みこの  
仰ぎかしこみ 進み来る  
歴史榮ある學舎よ  
歴史榮ある學舎よ

## ●「植民地」という矛盾の中で

台湾の経済が発展を遂げ、社会が成熟していくと、様々な「歪み」が生じるようになる。台湾総督府は同化政策を進めていくが、同時に台湾の人々は、不平等に気付くようになっていった。

1913（大正2）年1月22日、台湾総督府は公文書における漢訳文を廃止すると決定した。それまで、庁命令、告示、告諭などといった公文書には、漢訳文を付していた。しかし、国語のより一層の普及を目指すという名目で、訳文の記載が廃止されたのである。

これに対し、各地で反発が起こった。志賀もまた、民族平等を信条としており、台湾の土着文化を尊重する姿勢を貫いていた。そして、総督府の決定に反対の姿勢をとった。

志賀は台湾の人々におもねるような一面はなく、あくまでも自身の教育理念に従って生きていた。しかし、こういった理想は現実と向かい合う中で、徐々に軋轢が生じていく。



大甲附近の地図。教え子たちは広く社会を担う人材となっていたが、帰省すれば、必ず恩師を訪ねたという。また、大甲公学校の台湾人教員は多くが志賀の教え子であった。

志賀は台湾の伝統文化を軽視してはならないという信念を持っており、以前から、総督府の政策と方針に異議を感じていたようである。当然ながら、人々からは慕われるが、その一方で、官憲との関係は複雑なものになっていった。そして、苦悶の日々を送ることになる。

1921（大正10）年10月17日、台湾人の自治を求める「台湾文化協会」が発足する。林獻堂や蔣渭水が中心となり、台湾人の文化啓蒙と民族意識高揚を訴えた。志賀はその理念を評価していたというが、これがもとで官憲との軋轢が決定的なものとなった。

人格者として知られ、志賀とも親しかった大甲公学校の金子政吉校長は同僚のやっかみのもとで、職を解かれ、大甲を去った。この金子校長も多くの人に慕われた人物で、大甲公学校を辞した後、台湾総督府工業講習所の書記となった。金子は1938（昭和13）年に脳溢血で他界したが、翌年に教え子たちは大甲公学校内に石碑を設けた（残念ながら現存しない）。

## ●一生涯、雇い教員を貫いた理由

金子校長の後を継いだ校長と志賀は、そりが合わなかったようである。生徒や父兄、そして同僚となる台湾人教師から篤く慕われる志賀に対し、

校長は嫉妬したようである。

志賀は校長によって様々な形で疎まれたが、ここにはもう一つの理由があった。それは昇官を嫌ったことである。

志賀は出世を望まず、無私無欲の人物だった。生涯、雇い教員のままで大甲の暮らしを貫いたため、時には教え子が師範学校を卒業し、正規教員として郷里に戻ると、「雇い教員」の志賀よりも上席に座ることもあった。それでも、志賀は一向に気にする様子を見せなかったという。これもまた、志賀の「生きざま」が伝わってくる逸話と言えよう。

1924（大正13）年に撮影された一枚の古写真が残されている（澤田寛旨氏所蔵）。羽織袴姿の志賀哲太郎である（18ページ）。

通常、教師は判任官（大日本帝国憲法下における下級官吏）となった時点で、文官服を着用し、剣を吊る。しかし、教育とは威圧的であってはならず、剣などを吊っているのは真の教育は行なえないという考えの志賀は、昇官を固辞し続けた。そして、「教育とは子どもの知能を啓発し育てるものであり、役人根性を以てこれを律するのは教育の道に反する」という強い信念を持っていた。

こういった考え方だったこともあり、志賀は自らの経歴を語ることはなかった。そのため、人々は誰として志賀の過去を知ることはなかった。志賀が提出した履歴書には、明治法律学校で法律学を専攻したことは記されていない。これは高学歴であることを書けば、必ず任官させられるからである。また、国権党時代の政治運動や記者時代のことなども、口にしなかった。

任官を嫌ったもう一つの理由として、転勤の可能性を挙げなければならない。大甲という土地を愛し、大甲の人々と常にとともにありたいと願った志賀は、この地を離れることは望まなかったのである。

志賀は大甲の子供たちの教育に人生を捧げる決

意をしていた。そして、人々の中に溶け込み、人々のために生きる覚悟を決めていたのである。志賀は台湾の地を踏んで以来、一度も帰郷したことがなかった。ただひたすら、大甲という土地を愛し、教育に生涯を捧げたのである。

## ● 26年間無欠勤を貫いた教師

しかし、何度となく昇官を持ち掛ける校長に対し、固辞し続ける雇い教員という関係は、徐々に人間関係を複雑なものにしていった。

1924（大正13）年、大甲公学校高等科の学生と日本人教師の間で諍いが起こり、学校はこの学生に対し、退学処分を決めた。これを受け、生徒の親は志賀に仲介を求めた。志賀は校長に処分撤回を頼み込んだが、校長はこれを拒否し、さらに、志賀を教壇から退け、学校農園の管理をさせることを決めた。つまり、志賀は教育の現場に立つことを否定されたのである。

1924（大正13）年12月21日、この日、志賀の勤続25周年祝賀会が開かれた。この時は300名もの人が集まり、台中州知事、台中州内務部長、大甲街長ほか、街の有力者や教え子たちが志賀を祝った。志賀は壇上に立ち、涙ながらに感謝の気持ちを伝えたという。

志賀の教育姿勢は「厳格」という一言で示せる。他人に対してだけでなく、自らにも厳しく、在勤26年間にわたって無欠勤だった。大甲公学校の校長を務めた金子政吉の書簡によると、実は志賀は病気に罹ったことはあったが、それでも必ず一度学校に来て、出勤簿に捺印の上、帰宅したという回想が記されている。志賀は、「子供のいない自分としては、一身を犠牲にし、全てを捧げる決心をしている」という言葉を残しているが、有言実行そのものである。

一方で、厳しいだけではなかったという一面も容易に推測できる。志賀は生徒のみならず、地域住民に深く慕われていた。また、清廉潔白な人柄



志賀哲太郎を報じた台湾日日新報の記事（漢珍知識網より転載）。

で、謙虚な人物だったという。礼儀を重視し、誰に対しても丁寧に挨拶をする。たとえ、相手が児童であっても礼には礼をもって返すという生真面目な一面も持ち合わせていた。

### ●式典の一週間後、悲劇はやってきた

盛大な祝賀会からわずか一週間後、誰もが驚く事態が待っていた。

1924（大正13）年12月28日未明、志賀は毎日4時に起きる暮らしをしていたが、この日もいつもと変わりなく、この時間に起き、羽織袴姿で家を出たという。そして、帰らぬ人となった。

行き先は完成したばかりの水源池だった。身体に9キロもの石を括り付け、入水自殺を図ったのである。遺体が発見された際には、すでに息絶えていたという。

葬儀は12月30日に執り行なわれた。教え子たちが準備を行ない、中央の祭壇に霊柩が置かれた。右側には遺族席が設けられたという。志賀に遺族はいないはずだが、ここには教え子たちが先を競って座ったという。参列者は多く、会場に入れないほどだったと伝えられる。

この時、教え子を代表して、呉淮水という人物が弔辞を読み上げた。その文面は残っており、意義のあるものなので、以下に全文を掲載したいと思う。

### 弔辞

大正十三年十二月三十日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。

先生は明治三十二年二月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘二十有六年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる、その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気を奪い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす、嗚呼哀しいかな。

聞けば往事、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出廬し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、二十六年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す、大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。

彼、高樓に入り、我れ情誼の校舎に起居す。彼、巨万の富を有するに對し、我れ数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、孰れが貴きか未だ量る能はず、不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり、然るに名慾利情に勝つ先生は、終に健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし、志賀死すとも徳は死せず、不肖を薰化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はぬことを。

門下生 呉淮水 敬拝

なお、葬送の際、人々は道教式の「路祭」を行なったと伝えられる。これは祭礼方式の一つで、路傍に供物を並べ、線香を立てる。現在の台湾でもよく見かけるものだが、その意味するところは、志賀哲太郎という教師は「神」として扱われたということである。人々がいかに志賀を慕っていたかがわかるエピソードである。

なお、この日の参列者は1千人余りと言われる。



志賀哲太郎墓碑。志賀は徳育を重視した教育を目指したという。大甲の就学率は台湾の平均が50%程度に対し、70%と高い数字となっていた。



背面には志賀哲太郎についての詳細な記録が刻み込まれている。

そして、声を上げて哭かない者はいなかったと伝えられる。「街民挙げて聖人を見送る」という言葉は大げさなものではなかった。

### ●教え子が寄贈した墓地

志賀の墓地は鐵砧山に設けられた。これは志賀の教え子で、教師になった郭金焜が寄贈したものである。郭は明治45年卒業生で、戦後に大甲鎮の鎮長となった人物である（鎮は台湾の行政単位で町に相当）。

墓地は遺言に従い、台湾式で土葬された。墓碑の背後にはコンクリートで覆われた肉まん型の塚がある。ここに志賀は埋葬されている。

当初は仮埋葬だったこともあり、墓標は杉材を

用いた簡素なものだったが、1925（大正14）年1月8日に墓碑建設委員会が発足。大甲公学校の校長、大甲街の街長などが名を連ねている。

墓碑は高さ約1.2メートルの自然石で、1927（昭和2）年2月20日に建碑式が催された。正面には「志賀先生之墓」と刻まれている。

墓地の前には広大な土地が広がっている。ここには教え子たちの発議によって、1940（昭和15）年に「志賀先生記念園」が整備される予定だったが、残念ながら、戦況の悪化に伴い、実現しなかった。

1934（昭和9）年12月29日には、志賀の没後10年となる墓前祭が開かれている。この時は教え子と大甲の街民が集まり、墓前で手を合わせた。参列者は台中州知事以下、3千人を超えたという（台湾日日新報漢文版）。1931（昭和6）年当時の大甲の人口は2万2879人だったので、墓前祭がいに大きなものだったのかがよくわかる。

なお、島村ソデの墓についても触れておきたい。志賀の墓の左隣りにソデの墓碑がある。この墓碑もまた、志賀の教え子たちによって建てられた。ソデは1930（昭和5）年に世を去った。志賀の死後も大甲に暮らしていたが、出家したと言われている。出家先は東本願寺大甲布教所と見られる



没後十年の墓前祭を報じる記事。台湾日日新報の漢文版。「三千余名」の文字が見える（漢珍知識網より転載）。



墓地の前には草原が広がっている。教え子たちはここを記念公園にする予定を立てていたという。



志賀が教員として大甲に暮らしたのは26年間。巣立っていった教え子は1000名あまりと言われている。

が、これは推測の域を出ない。

## ●志賀哲太郎墓地を訪ねる

大甲の聖人と呼ばれた志賀の墓地は鐵砧山の南麓にある。大甲の市街地からは約1キロの距離がある。ここを訪れると、教え子たちが志賀をいかに慕っていたかを容易に理解できる。

墓碑は山肌に設けられているが、その周囲に教え子たちの墓地が並んでいる。志賀の墓碑は大きなもので、存在感を漂わせているが、それを護るかのように、台湾式の墓園が並んでいるのである。

北側に宋家、陳家、李家、李家、周家、蔡家と六つの墓園があり、東側に陳家と呉家の墓園がある。このうち、志賀の教え子という確証が取れているのは八名で、北側の陳家墓園には明治38年卒業生である陳啓明、その二つ隣りの李家墓園は昭和2年卒業生の李燕山が眠る。この二人は地場産品である大甲帽（パナマ帽）で大富豪となった大甲の名士である。

生前に慕われ、その教え子たちが人生を終える時にもなお、慕い続けた日本人教師。ここを訪れると、志賀哲太郎という人物像、そして、教え子たちとの関係がいかなるものだったのかが強く感じられる。



墓碑について語る張慶宗氏。島村ソデの墓地前にて。

志賀は台湾という地を愛し、それがゆえに上司と衝突し、挫折。自らの命を絶った。しかし、志賀がすべてをかけて育て上げた教え子たちは、志賀の精神を受け継いで社会に出て、台湾の「今」を創り上げた。そして、晩年は師である志賀のもとに戻り、ともに大甲の街を見つめているのである。

## ●大甲と熊本を結びつける存在として

そもそも、大甲の人々が志賀をして、「聖人」と呼ぶ所以はどこにあるのか。そして、聖人の定義とは何なのか。儒教においては、聖人は道德の体

現者であり、偉大さと崇高さ、心の高貴さが三大要素とされる。

志賀は生前、「慈悲、節儉、謙虚の三つがあれば、心はいつも平穏でいられる」と生徒に語っていたという。そして、実際に、教室以外では厳しい顔を見せることがない穏やかな人物だった。その生きざまは「誠実」という言葉で言い表せそう。そして、日本人のみならず、台湾の人々もまた、志賀の生きざまや人柄に感銘を受け、惹きつけられる感性と美意識を持ちあわせている。こういった共有できる価値観・道徳観の上に日台の絆があり、両者の緊密な交流は存在しているのである。

先述の増田氏は、調査を続ける中で、志賀とい



志賀哲太郎墓地を遠望する。周囲にはいくつかの墓園があるが、多くは志賀の教え子たちの墓である。



日本統治時代、台湾教育の聖地とされた台北の「芝山巖」（現在の芝山公園）にも合祀された。志賀の名が刻まれた石碑が今も残る。

う人物がいかに大甲の地で慕われていたかに驚き、そして、それが過去のみならず、現在にも受け継がれていることに圧倒されたと語る。

大甲の場合、志賀の教え子たちが能力を発揮し、地域の発展に大きく寄与していたこと、そして、張慶宗氏のような郷土史研究家の成果もあって、志賀の知名度は保たれてきた。現在、「志賀哲太郎顕彰会」でも、志賀に関する史料を集め、台湾とのやりとりを繰り返しているという。そして、合同慰霊祭や訪問団の派遣、講演会の実施など、様々な交流事業を行なっている。

最後に、本稿の執筆に当たり、筆者は「志賀哲太郎顕彰会」から各種情報の提供を受けた。『熊本が生んだ台湾大甲の聖人志賀哲太郎資料集』の主筆・増田隆策氏をはじめ、白濱裕氏、顕彰会の折田豊生氏、郷土史研究家・張慶宗氏、そして、志賀哲太郎という人物を今も郷土の偉人として扱い、慕う大甲の人々にも感謝の気持ちを伝えたいと思う。



大甲の中心部にある文昌祠では一室を「志賀哲太郎記念室」として整備し、各種資料の展示を行なっている。河本有紀提供。